

オルタナティブ

人間論

文◎田坂広志

text = Hiroshi TASAKA

3

人類の知 第二の成熟 「分析の知」から「統合の知」へ

21世紀に起こる「人類の知 七つ
の成熟」の第二の成熟は、何か。

それは、「分析の知」から「統合の
知」への成熟である。

では、「分析の知」とは、何か。

それは、「世界を知るためには、対
象とする世界を小さな部分に分割
し、それぞれの部分を詳しく分析し、
それを最後に総合すれば、対象を知
ることができる」という思想であり、
「要素還元主義」(reductionism)と
呼ばれてきた知の在り方である。

これに対して、「統合の知」とは、
「世界は、分割することによって重
要な性質が失われてしまうため、分
割し、分析したものを単に総合する
だけでは、世界の本質を知ることほ
できない」という思想であり、「全包
括主義」(holism)と呼ばれる知の在
り方である。

この「分析の知」の「世界を分割し、
分析する」という思想は、現実の社
会では、「専門主義」という形で現れ

る。例えば、人間社会というものを
理解するために、「歴史学」「政治学」
「経済学」「社会学」「社会心理学」と
いった様々な専門分野を設け、歴史、
政治、経済、社会、心理といったそ
れぞれの視点から人間社会という
ものを分析し、研究するという考え
方である。

しかし、近年、狭い専門領域に閉
じこもった「専門家」だけでは解決
できない問題に数多く直面するよ
うになり、異なった専門領域を横断
的に結び付ける「学際研究」や「総合
研究」が求められるようになった。

それが、大学に「総合研究セン
ター」と称するものが設立され、世
に「総合研究所」と名のつくシンク
タンクが生まれてきた理由でもあ
るが、残念ながら、その実態は、単
なる「専門家の寄せ集め」や「専門分
野の同居組織」にとどまっている。

その理由は、まさに、異なった専
門分野を横断的に「統合」する知の

在り方を見出ししていないことであ
るが、その問題を解決せんとして設
立されたのが、例えば、米国のサン
タフェ研究所である。この研究所は、
ノーベル物理学賞のマレー・ゲル・
マン、フィリップ・アンダーソン、
経済学賞のケネス・アローが共同で
設立したことにも象徴されるよう
に、物理学、経済学を始め、世界中
からあらゆる専門分野の俊英研究
者が集まり、まさに「学際的な議論」
を行うことによって、新たな「知の
在り方」を模索している。

この「新たな知の在り方」は、「複
雑系研究」(complexity research)
という言葉で、広く知られているが、
その研究は、いまだ端緒についたば
かりと言える。

これまで、「全包括主義は、理念に
すぎず、具体的な手法が無い」との
批判を浴びてきたが、21世紀、この
「複雑系研究」が、その手法への道を
切り拓くことが期待される。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院
修了。工学博士。87年、米国パテル記念
研究所客員研究員。90年、日本総合研
究所の設立に参画。取締役・創発戦略セン
ター所長等を歴任。00年、多摩大学大
学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフ
ィアバンクを設立。03年、社会起業家フォー
ラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダ
ボス会議)のGlobal Agenda Councilの
メンバーに就任。著書に「目に見えない
資本主義」「未来を予見する5つの法則」
など60冊余。